

もしも〇〇な家があったら ～思考を通じて親密な建築を実現する～

建築学科 3年 福田和生他 担当教員：越智健之

1. 建築展とは

「熊大建築展」とは、熊本大学建築学科3年生が毎年11月の紫熊祭に合わせて企画提案から製作、発表までを行う学生有志のプロジェクトです。今回私達は、身近な家をテーマに、建築の潜在的可能性について考えていきました。

私達自身の建築に対する知識・理解を深め、考えたことを表現する術やその難しさを学ぶことを目的とし(写真1)、私達がつくった空間を体験してもらうことによって建築やものづくりの面白さ、私達建築学生のエネルギーを伝えることが出来ればと思います。

2. 目的

大地震が起こった後、私たちを含む被災者に建築を信頼できないという意識がありました。そのことから私たち建物についてほとんど何も知らず、「キョリ」があることを思い知らされました。そう言われてみれば、商品化された住宅を購入している事が当たり前になっている現代で、建築について関心がないように思えます。そこで私たちの一番身近である”家”について考えました。それは、地震後の今、安易に災害に対抗する家を作るのではなく、「もしも...だったらなあ」という思考で、家をつくり実際に体験します。この過程で家に対する視野を拡げ、私たちが建物とあらゆる”キョリ”を親密にすることを目的としています。

今年のポスター(図1)は家には様々なカタチがあり、もっと自由で良いのだと言うメッセージが込められています。

3. 実施概要

「家」を”空間”と”部材”に分類し、さらに”空間”を”ボリューム班”と”境界班”、”部材”を”部材再考班”と”部材置き換え班”に分け、「もしも...」という視点から、それぞれの分野の可能性を模索しました(図2)。

・ボリューム班・物理的に距離が近い小さな空間の家(約3畳)を暮らし方の多様性を想定を踏まえた上で自由に設計しました。このことは、「広い家」=「豊かな暮らし」という概念を打砕き、目的に応じた快適な住まいは、考え方一つで空間の潜在的可能性を引き出すことができるというメッセージを伝えます。

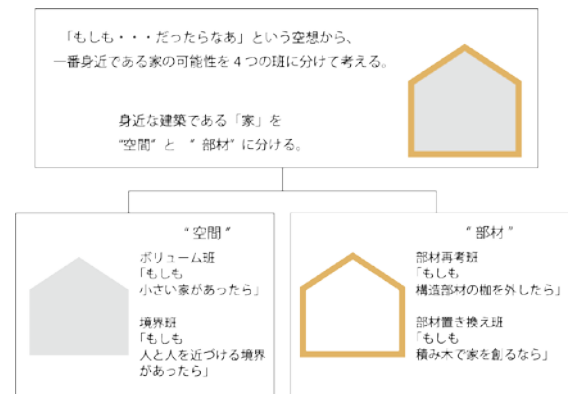
・境界班・身の回りにある境界を空間を分ける度合いで再考し、実在する建築物の模型展示や自分達でアレンジした境界を提示します。人は集団で生きていますが、地震から避難した際にわかったようにプライバシーや関係性を保つために空間を分かち境界が必要である。この展示を通して、普段気にしない境界について考えるきっかけを与えます。



(写真1：作業風景)



(図1：建築展2016ポスター)



(図2：ダイアグラム)

・部材再考班・・構造部材をそのままの機能を残しつつ新たに可能性を持つ家の形を提案します。普段化粧材に覆われ人の目に触れない構造部材を再考し理想を具現化することで、構造部材の存在を知らせて家を身近に感じさせる展示をしました。

・部材置き換え班・・身近なもの(レゴや積み木といったおもちゃなど)に建築の一部として使える要素を付加させ、新たに機能を持つ構成部材をデザインしました。そのモックアップを多数作ることで、その形状(L字体)から、一様でない積み上げ方で生じる内外の変化を感じさせ、身近なものの可能性を提示しました。

以上からわかるように、多数の模型(写真2)やモックアップで事例をたくさん示すことで、来場した方が「もしも...」と連想しやすくなるという狙いがありました。その他に、展示されていないとやむなく没案となった「もしも...」や、来場された方に書いてもらう「もしもボード」(写真3)を会場内にしておくことで、更に連想しやすく、自らが家を考えるきっかけとなるように工夫しました。

会場内は全体的に木を使い、統一した世界観を作り上げました。順路に沿って展示物を配置しました(写真4)。

建築展で使用した木材は、製図室の靴箱や椅子に再利用されました(写真5)。

4. おわりに

今年はこの熊本で未曾有の大震災が起こりました。安定の拠り所を失った人々は、先の見えぬ現実に対する不安を抱え、非日常な経験が私たちと建築との距離を引き離れたかのように感じました。家と人の関係は、電子機器と人のように得体の知れない、しかし切っても切り離すことのできない関係に似ていると思います。

そうならば耐震性や効率性を追い求め「機械化」する家を傍観するのではなく自らそれを理解し判断することが必要だと考えました。建築学科に在籍しているといえども、私たちは建物についてまだ何も知りません。無知が故に、建築という言葉でまとめきれない事象を改めて見つめ、発見と実感を通して、能動的に建築を創造するきっかけとなれば良いなという希望を込めて「建築展2016もしも...展」を開催致しました。十分に噛み砕くことは困難で、何度も壁にぶつかり、悩みが尽きなかった半年間でしたが、何とか形にできたことを嬉しく思います。

末尾ではありますが、建築展2016開催にあたり、アドバイザーの越智健之准教授をはじめ、貴重なご支援、ご協力、ご尽力を賜りました関係各位に対し、心より感謝申し上げます。



(写真2：模型写真)



(写真3：もしもボード)



(写真4：会場風景)



(写真5：使用した木材の再利用例)